
櫻の樹の下で

恵多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

櫻の樹の下で

【Nコード】

N8293F

【作者名】

恵多

【あらすじ】

20XX年。近年、世界中に異常気象が発生していた。冬に咲く春よりも紅い櫻。クローン人間武藤5号と超常能力者、時任少年は、桜の樹の下で出逢った。ミステリーSF仕立て。

出会い（前書き）

S F E 作品です。

出会い

20XX年。

春よりも紅い櫻。

近年、世界規模で異常気象が続くのが当たり前になってきている。

これも、その一つだろう。

もう12月。メリークリスマスも近いのに、櫻が日本の至る所で満開だとは…。

どこかのTV局のニュースで、夜桜見物を楽しむ人たちも増えてきたとか言っていた。

もう、これは日本の常識。櫻といえば春だけの名物とはいえないのかもしれない。

大体、真夏にだって雪が舞ってたりする年があるのだから。

ただ、春の櫻と違ってるのは、少し花卉の色が紅いつてことか。

とある公園の櫻並木。

彼が、今見ている櫻は、今の時期、その辺の公園に何処にでも咲いているソメイヨシノだ。

こうして櫻をマジマジと見るという行為そのものが、もしかして彼には初めての経験かもしれない。

櫻…。最後に見たのは、大学の友人達との夜桜見物で…。

いや、その時も、見たとは言い難い。

大抵が、「夜桜見物イコール宴会」だからだ。その時も、友人達とはしゃいで飲んだくれて大騒ぎしてた。

櫻の下で。目の端に、櫻の花びらが舞っていた。

そういう記憶しか残っていない。

「余り見入っていると魂吸い取られるぞ」

振り向くと櫻の花びら舞い散る中。一人の少年が、立っていた。

「ほら、よく櫻の下には死体が埋まってるって言うだろ？ あれ、ホントに埋まってると思う？」

世間話をするかのように少年は、俺の横に並んで問いかけてきた。

「さあ？ そんな事、初めて聞いたな」

何だ？ こいつ……変なヤツだな。

初対面の見知らぬ人物に向かって、「死体」なんて言葉をまるで挨拶でもするかのように言つてのけたのだ。

見た目は、高校生くらいか。

細身で背が高く、この間、一瞬ＴＶで観た何とかって若手俳優に似てるかな？

黒い髪とまだあどけなさの残る顔に少しキツメの瞳が印象的だ。

「ねえ、あんたモデルか俳優？ それともホスト？」

少年は、俺にそう笑いかけて聞いてくる。が、特徴のある瞳は決して笑っていない。

「…ただの一般人だよ」

素っ気無くオレは答えた。

「ふん。いかにもって感じだからさ。女にモテそうな、さ」その言葉が、何故か棘を含んで聞こえる。

「……」

いかにも 確かに、そういうことはよく言われる。ただ立ってい

るだけで、周りの視線を感じる事も多々ある。
が、(…くだらん)

俺は、それには答えず少年に背を向けて歩き出した。
その後を、少年は追いかけてくる。

「あんたさ。背高いよな。俺も高い方だけどさ」

「歩くの速いのな。それって、やっぱり足の長さが関係してんのかな」
「なあ、聞いている？ 人の話？」

「うぜえ…。何だ？ こいつはっ！！」

「お喋りは好きじゃない」冷たく言っただけで追い払ったつもりが、

「あ。そうなの。同じだね。うん。オレも余り好きじゃないかも」
そう言っただけで、俺の後を追うように付いてくる。

「何で付いて来る」

「え？ 何でって。オレんちこっちだもん」

俺は、歩幅を緩めず顔だけ少年の方を振り返った。相変わらず大きなキツイ瞳を俺に向けてる。が、口元は、微妙に笑いを含んでる。
明らかにウソだ。仕事上、そういう事は解る。
だが何だあって、オレの後を付いて来るんだ？

公園を出てパーキングまで来たとき、少年は言った。

「オレ、時任 嵐。あんたは？ 名前」

「…山田 太郎…」

「ウソだ」即ちちょっと、口を尖らせて可愛い顔してそう言う。

ウソだよ。

ホント、変なヤツだな。見も知らぬ男の名前なんて聞いてどうするよ。それも、一回り程も年上の…。聞くならその辺の若いおねえちゃんの名前でも聞けばいいだろ。

と、ああ、そうか。今流行の「MO HO」くんかもな。

ひと昔前と違って、現在じゃ同性同士の恋愛なんてフツウだし…。

何年前には、法律で結婚も可能になったしな。

とはいうものの、やはりまだ同性同士のカップルには、世間の風は冷たいが。

「悪いが時任くんとやら、俺は君に名前を名乗る義務は無い。おまけにゲイでもな」きっぱり、そう言い放った。

時任少年は、大きな目をパチクリさせてる。あのキツイと思った瞳が、一瞬可愛いと思う瞳に変わった。

「まあ、そりゃそうだろうけど。警戒してんの？ 俺何もしないよ。ホモでもないし。ただ、あんたの名前知りたいな」と思っただけで「時任少年が言い終わる間もなく

「じゃ

俺は、車に乗り込んでドアを閉め発車した。少年の横をすれ違う瞬間

「バイバイ。

さん

え！

今、俺の。

急ブレーキ。

慌ててドアを開けて振り返ったが、少年の姿はもうそこには無かった。

何で？空耳だったか？

それは、そうだろう。さっき初めて出逢ったあの少年が、俺の名を知ってるわけが無い。

それも、フルネームで……。

「武藤 将平さん」と。

まるで、狐……いや、櫻に化かされたのかと思った。
それが、彼。時任 嵐との出会いだった。

出会い（後書き）

出会い編は、自分が一番気に入ってる章です。
ブログにUPした作を少し手直ししてます。

ヒトゲノム再生研究所（前書き）

益々、エセSFになってます。

そのせいか。

久しぶりに、彼女の夢を見た。彼女が死んでもう5年になる。その間、夢という夢は見なかったのに…。

その日、俺はヒトゲノム再生研究所の資料室にいた。この研究所は、日本政府唯一公認のヒトクローン研究所だ。

日本の人口は、近年激しく減少している。これは、日本に限った事ではなく世界的に男女間の生殖能力が著しく低下し始めた為だ。地球が抱える異常気象問題と関係しているのかもしれない。

このままでは、日本に未来は無い。いや、地球全体に…。

そのため、危機を感じた政府は、今から50年ほど前にそれまで禁止していたヒトのクローン再生に着手した。そのわずか10年後、クローン再生を許可する。見切り発車もいいところだ(この小説のように)

ヒトクローンは、ヒトの細胞から培養カプセルの中でヒトの容に形成され、記憶を埋め込まれ十月十日で成人となって誕生する。クローンというより、人造人間だな。

だが、政府のしでかす事は、何時の時代も間が抜けている。

クローン一体を作るのに、人間一生分の費用が掛かるのだ。この不景気なご時世にそれだけの金を費やす者なんて、いない。

おまけに、認可が下りるまで、あらゆる項目をパスしなければならぬ。無事パスしたとしても、クローンの所有権は、政府に在る。

そんな理由で、今現在日本に生息するヒトクローンは、数えるほどしかない。そのどれもが不良品で。何やってんだ。日本政府!?

まあその内、このクローン計画も白紙になるだろうな。

俺はその研究所の資料室で過去50年、自分に拘った総てのデータをPCで検索する。

やはり、少年に関係するであろうデータは出てこない。

「やっぱりな・・・」ため息混じりに呟いた。その瞬間、部屋にコーヒーの匂いが漂った。

「おごりだ。飲めよ。随分とご熱心だな」

何時の間にか、榊が俺の後ろでPC画面を覗き込んでいた。

俺は、ビツクリすると同時に苦笑する。

人の気配にも気付かない程、熱中してたのだ。

榊が敵なら俺は今頃、死体だな。

「死体……」そういえば、時任少年もそんなこと言ってたな。

『ほら、よく櫻の下には死体が埋まってるって言うたろ？』

あれ、ホントに埋まってると思う？』

俺の思考回路は、時任少年に飛んでいく。

…どうも、気が付けば、俺は昨夜から彼のことを考えているようだ。この俺がだ。

「どうした？ 武藤。おまえ今日は、隙ありすぎだぞ」

そんな俺を珍しいものでも見るかのように榊まか 真哉しんざは言った。

「何を探しているのか知らないが、PCで検索するよりおまえの頭の中で検索した方が早いだろう」

「まあな」

榊は朝から、研究室を出たきりの俺が気になって覗きにきたのだろう。

「で？ 探し物は見つかったのか？」

「いや…。多分、俺の勘違いだ」椅子の背もたれに背を預けて俺は素っ気無くそう言った。

「勘違い？ おまえが、か」口の端に薄い笑いを浮かべて榊は俺を見た。

俺はゆっくりPC画面を閉じて

「そんな事もあるさ」と、席を立つ。

榊は、その俺の腕を捕まえ「言えよ。何を探してた」
有無を言わせない鋭い目が光ってる。

「……榊。おまえがもし見知らぬ、その日初めて出会った相手にフルネームで名前を呼ばれたらどうする」

「…ビックリするな。それは、…事実か」

「昨日の出来事だ。それも、高校生くらいのガキにだ」

一拍置いて榊は、言う。

「おまえのファンじゃないのか？ 一目会ったその時からってヤツで。こっそり、おまえの事を調べたんだ」

「馬鹿か。どうやって？」

「ふん…」榊は、眉を顰めた。

それは、有り得ない。

オレと榊は、クローンだ。成人として生まれてまだ9年。だが、頭の中には、50年分の知識が詰まっている。

そう、オレ達の基は、50年前この研究所の研究者だった。

オレ達の基、武藤 将平と榊 真哉は、自分の細胞を実験台にしたのだ。何度も失敗を重ね二人が死んで20年後、完成したのが、今ここに居る自分達だ。

だから、オレ達に名は無い。戸籍も無い。「武藤5号」と「榊5号」。
それが、オレ達の本当の名前。

オレ達は、二人に代わって（過去50年分の頭の中のPCよりも高性能の記録とともに）今この研究所に養われている。

なのにどうしてあの少年は、俺の本名（基の名前）を知りうる事ができたのか…。

研究は、国家機密でなければならぬ。

もし、これが原因で俺の周辺から何かが少しでも外に漏れでもしたら。

俺は、即、国外追放となるだろう。

「…それも生きて追放されるかどうか…」

榊は、それを聞いて笑った。

「おまえは、殺しても死なない。オレがまた再生してやる。だから大丈夫だ」

「そのガキは美人か？」

榊の問いにふと首を傾げながら

「美人：男にも美人で言葉を使うのなら美人かな」

榊は、へえ〜。と笑って

「男か。おまえ男OKだったっけ？」

「興味ない」俺は即答する。その答えに、榊が即答した。

「興味ないのは、男も女もだろ」

「そうだな」反論はしない。俺は総ての事に興味が無い。榊の言葉を軽く受け流す。

「でも、その美人のボーヤには興味あるんだろ」

榊は、コーヒーを一口飲んで笑ってこう言った。

「おまえも俺と同じ人間だったんだなと、安心したよ」

「クローンの出来損ないだけだな」そう言った俺の顔は

多分、今酷く歪んで笑ってるだろう。

「クローンだって、立派な人間さ。おまえも俺も」

榊は、その顔を見て見ぬ振りして、苦い顔をしてコーヒーを飲み干した。

「…ふん。下らん話しは、お終いだ。

ああ、そつだ。武藤　ボスがおまえを探してたぞ」

「それを早く言え！」

俺は資料室を飛び出した。

一人残された榊は、

「慌しいヤツだ。俺のおごりのコーヒーに手もつけないで…」

相変わらず、苦い顔でそう呟いた。

ヒトゲノム再生研究所（後書き）

ブログ掲載小説です。

思考回路一時停止

資料室から直行、オレは『第一研究課』の課長室へ駆け込んだ。

「何処行つてたんですか。武藤教授？」

第一研究課のボス。嶋田しまた綾子あやこはオレを見るなり慌てて駆け寄ってきた。

彼女は、オレと榊がまだ基の頃。この研究所へオレ達の助手として大学院時代に引き抜かれてきた才女だ。あれから30年。若かった彼女も、もう直ぐ定年で…オレ達の唯一の上司（まあ、今では母親代わりみたいなもの）として、ここに勤務している。

「その教授てのはやめてくれ。何だ？また、始末書か？」

「それもあります。あ。そういえば、先月の始末書、まだ提出して頂いてませんが。榊教授には、先程、全部提出して頂きましたよ」と、あっさり嫌味交じりにそう言われた。

「…今週中に纏めて提出するよ」
はあく、ため息が出る。

クローンに不具合が出る度、俺と榊には大量の始末書類が回ってくる。目を通すだけで、一日が潰されるくらいの…。

だから、始末書と聞くだけで俺は憂鬱になる。

大体、この間まで出回っていた3号機は、おれ達の基が作ったものだ。オレ達（5号）に責任は無いだろうと思うのだが…。

実際、3号機は酷かった。よく13年も持ったものだと思う。

武藤3号は、生まれて3年程経過した時に、脳に違和感を覚えた。

それは、朝から晩まで一日中、大きなミミズが脳内を這い回って刺激するかのよう不快な感触で、激しい痛みを伴った。

最初は抑えられていた鎮痛剤も徐々に効かなくなり、最後の3年は

モルヒネに頼った。が、それも効かなくなった武藤3号は苦痛の余り、ある日、何気に自分の頭を銃で打ち抜いていた。

その場に居合わせた榊3号は、その砕けた脳の記憶装置を修理し武藤3号の細胞で武藤4号を再生した。

まあ、榊3号も榊4号が誕生したと同時に自己崩壊（自殺）したが。

しかし、よく50年そこらでこれだけ技術的に進歩出来たと感心する。

1号は、カプセルから出た途端、ヒトの容にもならず見るも無残に跡形も無く崩れ去った。

2号は、武藤が5年半。榊が6年。辛うじてヒトの容を保った。

3号は2体とも13年持った。だが、脳と身体の連結が巧く行かず上記の理由で自己崩壊（自殺）した。

4号は、今世間に数体出回っている。が、これも3号と同様。脳と身体のバランスが取れず、自己崩壊している。

（因みに、3号までは基が作り4号は3号が。5号は4号が作った）

「それより教授。お客様ですよ」

「え？オレに？」

ボスに釣られて顔を部屋の隅のソファーに向けると、50歳位の紳士顔した男が腰掛けていた。

男はゆっくり立ち上がり、礼儀正しくオレにお辞儀をして

「警視庁特別捜査班班長の島津一^{しまい}です」^{いちほ}そう言った。

「警視庁…」聞いて瞬間、全身にどっと冷や汗が流れる。

まさか、心配していた事が事実となったか？

「教授は、時任 嵐くんをご存知ですね？」鋭い目をオレに向ける。やはり！！
特別捜査班ってことは、特別の捜査班だろうから、オレの周辺から国家機密の何かが漏れたんだ。そうか。そしてオレは、このまま、廃棄処分されるのか…。

「…ご存知というか…それ程、ご存知でもないですが」
情けないことに緊張と恐怖のあまり声が、上擦ってしまった。

島津の警官特有の鋭い目は、オレの一挙一動を観察するかのよう
に射続けている。

オレの心臓は、口から飛び出しそうな勢いでバクバクいつてる。

ボスはそんなオレの様子を敏感に感じ取って、オレを庇うように島津の前に立ち塞がった。

「武藤教授は警察のご厄介になるような生活をしておりませんが、武藤教授に何か不備がございましたら然るべき手続きを取って、再度出直して頂きたいのですが」

ボスの言葉に島津は、事務的にあっさり答えた。

「ああ。人を観察するのは、どうもクセらしくて。ですが、教授に疚しい所がなければ見る位はいいじゃないですか」

ボスは、その言葉が癪に障ったらしく

「そうですね。まあ、武藤教授は端整な顔立ちのうえに体躯もいい、洗練された美男ですからね。「失礼」の言葉も無く、島津さんが嘗め回すように教授に見惚れるのもよく解りますよ」

ボス。あんたそれ警官相手にケンカ売ってるよ。

「あっ！いや、恐縮です。失礼しました」
言われた島津は赤面して頭を掻き、慌てて何度も頭をさげた。

その様子から、オレの心配は無用だったのだと理解できた。ボスも島津の「失礼しました」を聞いて機嫌を治したらしい。

「教授。取りあえず、座つたら…。あ、島津さんも。今、お茶をお持ちしますから」

「いや、お構いなく。出来れば、教授と二人で話したいことがあるのですが」島津は、にこりとボスに微笑んで、ソファーに腰掛けた。ボスは、まだ半分放心状態のオレを島津の前席に座らせて、「では、私は隣室にいますので、御用がおありでしたらお呼びください」そう言つて部屋を出て行つた。

それを待ち受けていたかのように島津は口を開いた。

「時任くんは、あなたが協力してくれるならとそう言つたもので」

『時任…。ああ、あの少年か…。』ぼんやり考える。まだ、緊張が解けず巧く頭が回転してないらしい。

「はあ…。協力つて…。何を？」島津は、間の抜けた返事をしたオレに構いもせず

「武藤教授は、『夜桜連続行方不明事件』をご存知でしょうか？TVのニュースでも各局連日特集を組んで報道していますが」

「ああ。それなら…。」研究一筋のオレでも知っている。

何年前から、夜桜見物に出かけた男が次々と行方不明になっているという怪事件だ。

一緒にそこに居た人物が、目を離れた数秒の間に忽然と消えていたという。

UFO説とか異次元説とか、実しやかに噂され今世間で最も話題になっている事件なのだ。

「先週も、某番組の若手人気キャスターがこの事件を取材中に行方不明になりました」眉間に皺を寄せて一大事とばかり島津は言うが、

「はあ…」解らない。何で、オレにそんな話しをするのか。

そもそも、それがどう時任少年と関係があるのか。

続けて島津は、意外な人物を口にした。

「教授は、笹山ささやま 志保しほ師を憶えてらっしゃいますか」

「ああ、俺の基が。師は、一流の超常能力者で、脳の実験研究に何度か協力して貰いました」

もう、40年前の話になるな。

その頃、作った2号機に超常能力の傾向が強く出たため武藤（基）は脳に興味を持ったのだ。師を紹介してくれたのは、政府だった。

その時、師の家系は、代々その能力を超心理学界で高く評価され当時警察が、解決不可能とされた事件などを次々解決していると聞かされた。政府お墨付きの超常能力者だとも。

「時任 嵐くんは、師の実妹のお孫さんにあたります。彼にも師と同じ能力があるとのこと、日本警察は政府の許可を得て、先日彼に特別捜査官として事件解決への協力を求めたのですが」

ああ、そう。孫か。なら、時任少年がオレを知っていたとしても不思議ではない。師は歳は食ってたけれど可愛い女だった。感度も良かったしな…。

オレがお盛んな昔を思い出している間にも島津は、話を続ける。

「時任くんが…。武藤教授が。あなたが一緒なら、協力するとそう言ってます。だから。」

だから、あなたも捜査に協力してください。お願いします!!」

島津に思い切り両手を握り締められた。

「はあ？」

あまりの展開にオレの脳は一時停止し、身体は両手を握られたまま暫し硬直していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8293f/>

櫻の樹の下で

2010年10月9日04時42分発行